漫画『約束のネバーランド』で読み解く『不思議の国のアリス』

人文学部国際英語学科　戸田慧（アメリカ文学・文化）

『約束のネバーランド』(2016～2020)　原作：白井カイウ、作画：出水ぽすか

孤児院グレイス＝フィールド・ハウスの子供たちは、家族同然に幸せに暮らしていた。里親が見つかり施設を出る少女コニーの忘れ物を届けようとしたエマとノーマンは、コニーの亡骸を囲む異形の「鬼」たちを目撃する。ここは鬼の食糧となる子供を育てる「農園」であるという事実を知り、エマたちは脱獄を決意する。

ルイス・キャロル(Lewis Carroll, 1832 -1898)

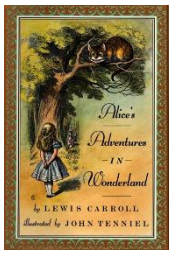
イギリスの数学者、写真家、作家。本名チャールズ・ラトウィッジ・ドッドソン(Charles Lutwidge Dodgson)。オックスフォード大学の数学講師となり、趣味の写真を通じて同僚である学寮長の娘たちと知り合い、その中の一人少女アリス・リドルのために語った創作物語を、後に『不思議の国のアリス』として出版する。

『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865)

少女アリスが白ウサギを追いかけて不思議の国に迷い込み、しゃべる動物や動くトランプなどと出会いながら不条理で不可思議な世界を冒険する物語。ナンセンスな言葉遊びが多く、当時の流行歌や教訓話のパロディも多い。イギリス児童文学の黄金時代の幕開けを告げる象徴的な作品と言われる。

◆案内役の白ウサギ

白ウサギ＝主人公を[　　]に導く案内役



◆「子供」のアリス VS「大人」の不思議の国

引用①「18 世紀半ばに産業革命を経験したイギリスでは、技術革新が進む一方で、自然破壊、公害、貧困、失業、犯罪などのさまざまな社会問題が生じてくる。労働者階級の子供は幼いころから過酷な労働条件のもとで就労し、家計を助けた。(中略) 19 世紀になると、「子供」という観念に変化が生じる。運よく生き延びた子供が大人社会に吸収されていくという旧来の考えは捨てられ、子供はもはや「未熟な大人」、「大人の小型版」とは呼ばれなくなった。(中略) 子供は成長や発展のシンボルであり、感受性が強く、想像力豊かな「子供時代」は人生で一番幸せな時期であると尊重された」(桂、高田、成瀬 12)

引用②「挿絵からもわかるように、白うさぎは自分では威厳があるつもりの英国紳士であり、キャロルはそれを臆病さの代名詞である白うさぎで表すことによって、英国紳士の実態をあばいているのかもしれません」(河合 180)

引用③「キャロルの『不思議の国のアリス』が少女アリスをうんざりさせているヴィクトリア時代の大人の「常識」を不思議の国を舞台に誇張し、パロディ化し、茶化すことで覆し、彼女（と作者）の精神を解放する物語であるというのが通説である。(中略) 物語の冒頭で姉が読んでいる本を覗き見たアリスは「絵も会話もない本なんて、一体なんの役にたつのかしら？」と思う。大人の目には役に立つと映るものが、子供の目にはそうでないのである」(桂、高田、成瀬 23)

【参考文献】

キャロル, ルイス『不思議の国のアリス』河合祥一郎訳、角川文庫、2010 年
桂宥子、高田健一、成瀬俊一編著『英米児童文学の黄金時代』ミネルヴァ書房、2005 年
河合祥一郎「訳者あとがき」『不思議の国のアリス』角川文庫、2016 年
白井カイウ・出水ポスカ『約束のネバーランド』集英社、2016 - 2020 年
戸田慧『英米文学者と読む「約束のネバーランド」』集英社、2020 年
Carroll, Lewis. *Alice's Adventures in Wonderland*, MacMillan and Co.,1866.

【国際英語学科 Instagram】★学科ウェブニュースやイベント情報を載せています。ぜひ登録してね！

INTL.ENGLISH_JOGAKUIN_U